

27 きゅうり

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	40	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

(1) 特徴及び吸収特性

きゅうりの根は浅く分布し、**酸素要求度が高い**。従って**保水性と排水性の良い土壌**が向く。土質はあまり選ばない。深耕ローターやサブソイラーなどにより排水性の向上を図る。きゅうりは苗の定植後1ヶ月で収穫が始まり、開花後10日程度で収穫できるなど生育が早い。このため養分の欠乏や干ばつ、湿害などにも敏感に反応する。果実をまっすぐに肥大させるため、生育後半は特に**窒素の肥効を安定させる**とともに、根の活力を維持するよう努める。

収穫が始まると養分吸収量が増え、収穫盛期の50日後には全養分吸収量の50～60%が吸収され、その後は収穫が終わるまで養分吸収が続く。部位別では、窒素、リン酸、カリの50～60%が果実に吸収されるのに対し、石灰は10%、苦土は30%しか果実に吸収されず、残りは茎葉に吸収される。目標収量を10a当たり10tとした場合の養分吸収量は窒素25～30kg、リン酸8～10kg、カリ35～40kg、程度である。窒素は生育全期間を通じ**ほぼ直線的に吸収が行われ収穫と共に持ち去られる量も多い**。このため窒素不足を生じさせない肥培管理が大切で、追肥を重点に施肥することが多い。また、窒素過多は雌花の着果節位を上げ、初期収量が低下する原因となるので、**全期間にわたり適量を供給する**ようにする。

完熟堆肥などの有機質資材を併用し、できるだけ深く施肥し根域の拡大を図ることが必要である。リン酸の全量と窒素、カリの40～50%を基肥とし、残りを追肥することが多い。追肥は定植後15日頃から行い、1回につき窒素成分で5kg/10a以内の範囲で、株の周囲に4回程度に分施する。

目標収量と養分吸収量

目標収量(kg/10a)	養分吸収量(kg/10a)				
	窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土
10,000	25～30	8～10	35～40	20～30	5～8